沖縄の来訪神伝承

――沖縄本島西部諸島の神話と儀礼――

遠藤庄治

(1) 伊是名島の来訪神伝承

1 降神島 注1

話者　仲田徳正（大正三年一月生）字仲田

昔、降神んかい、神様ぬ降りてぃ来い、神様や降神かい降りやー、天から降りて来、またアハラ御嶽かい、うぬ神様や降りぇーめーしちゃとうや、アハラ御嶽んけ降りたとうや、世ぅ明きえ、うにぬやま世や暗さたしが、うぬ神様ぬアハラ御嶽んけ来え世ぅ明きえ、うまから、なーフマイ洞窟かい行ちぇー、またふまえー、また世ぅ明らなーこーならんてー、神様連中ぬ、ななぬ神様ぬ行じえー、なー、願えーしちゃくとう、フマイ洞窟んじぇ、世ぅ明ちゃんでぃぬ話やいびん。

（共通語訳）昔、降神島に神様が、（天から）降りていらっしゃって、神様は、降神に降りた。天から降りてきて、そこからまた、アハラ御嶽に、その神様は降りたので、アハラ御嶽に降りたので、世は明けた。それまで、世は暗かったけど、その神様がアララ御嶽に来たので、世は明るくなった。それから、クマヤ洞窟に行って、そこでまたこもった。それでまた、世を明るくしないといけないといって、神様たちが、七人の神様が行って、願ったので、クマヤ洞窟から世が明けたという話です。

昭和五六年四月四日　西銘千恵美聴取
方言翻字、対訳とも西銘千恵美

2 降神島 注2

話者　浜里正治（明治三一年九月生）字仲田

昔ですね、大昔、神様が、仲田部落の前に岩がありますが、その岩に、天から神様が降りて、そして、降りたので、そこを降神という。字で書けば、降神といいますが、方言では、降神と言っています。そこで、そこに神様がたくさん降りられて、村がまだまだ開拓がされていなくて、そして、その間に、神様がいろいろいざこざがおきて、そして陸にあがって、今の伊是名城跡のそばに、山がありますが、その山で、サザイをしたんだそうです。そのいざこざのサザイをしたら、そこが、そのサザイをしたので、その山の名前をアカラ御嶽と呼んでおります。今でも、アカラ御嶽といって、拝所に

なっております。それで、そういう理由があるのかも知れませんが、日本本土から、天戸開きといって、昭和二十七、八年だったと思いますが、来て、天戸開きをしていったこともあるので、そういうこともあると、私は信じています。

昭和五五年九月四日　遠藤庄治・大嶺ますみ聴取

翻字　西銘千恵美

ここに掲げた二話は、ともに、伊是名島に伝えられる降神島の話である。伊是名島は、沖縄県の島々の中では、奄美諸島に最も近い沖縄本島北西部の伊平屋諸島の中の一つで、北緯二六度五六分にある。伊平屋諸島は、行政区としては、後地（くしし）と呼ばれる伊平屋島を中心とする北部の伊平屋村と、前地（めえし）と呼ばれる伊是名島を主島とする伊是名村に分かれる。伊是名島から、沖縄県の行政の中心地那覇までは、九六キロである。

この話の中の、降神島は、島の東部に位置し、本部新港からのフェリーが発着する仲田港の南東の沖合にある岩だけの小さな島である。また、降神に降臨した神が巡幸したと伝えられる1のアハラ御嶽、2ではアカラ御嶽と呼ばれる拝所は、降神島に最も近い高さ九八メーターの円錐形の伊是名城と、島の南岸近く、やや西寄りにあるかつての行政の中心地である字伊是名のほぼ中間にあり、陸（あき）ギタラと呼ばれる海岸近くの奇岸のすぐ北にある山である。神がこもったと言うフマイ洞窟（がま）は、共通語訳にある通り、一般には、クマヤのガマと呼ばれ、後地と呼ばれる伊平屋島の北端に近い字田名の北方、東海岸近くにある洞窟で、入り口は広くないが、中は広さ約二百坪高さ十メートルほどの洞窟である。

この二話からどのようなことを読みとるかは、さまざまな課題が予想される。

① 降神島への神降臨の意味、島の神事と信仰との関係、降神島の方位と信仰、降臨した神の性格など主として降神島に関する課題。

② アハラ御嶽への神の再降臨また巡幸の神話的意味、サザイと呼ばれる神の裁きと世が明るくなることおよび御嶽の名義との関係、この神話的伝承と伊是名の神事の関係などアハラ御嶽に関する課題。

③ クマヤ洞窟に神がこもる理由および、クマヤ洞窟から出ることを願いに行った七人の神などクマヤ洞窟に関する課題。

④ 右の二話と南西諸島における来訪神伝承とそれに関する神事および、記紀神話をはじめとする日本神話体系との関連、さらに、天戸開きなどによる近代以後の日本神話の影響。

神話と神事だけに限定しても、右のようなさまざまな課題がこの二話に関連して存在する。しかし、この論考において、これらの課題をすべて対象とすることはできないので、副題に記したように、伊是名島の比較的近くに存在する沖縄本島西部諸島の神話伝承と神事儀礼を比較して、この話の意味を問うだけに止めたい。

ところで、そうした検討に入る前に、伊是名島における降神島の伝承を概観し、伊是名島でのこの話の位置を探っておきたい。伊是名島で聴取した降神島に関連する話は、前掲の二話も含めて二一話であった。すべてを梗概化して紹介すると分量が多くなるので、前

掲の二話はのぞき他の話は要点だけをまとめると次のようになる。

類話1　降神に降りたのは天照大神という。村を照らしていたが、何があったのか海にかくれ、その後クマヤガマに隠れた。

類話2　大昔、降神（うりがみ）に降りた天照大神は、カーラ御嶽ともいうアカルイ御嶽に長く住んだ。その近くには人も住むようになったが、後に天城に住み、さらにその後伊平屋島に渡ってクマヤガマに住んだ。

類話3　降神に天から人が降り、そこからアハラ御嶽、さらに大野山に行った。

類話4　降神に降りた神はアカラ御嶽にのぼって四方をながめ、その後天城に行った。さらに伊平屋島のクマヤガマに入った。神武天皇は伊平屋から出た。

類話5　降神岩に降りた神話は、道もないところを夜歩いてアカラ御嶽に来ると夜が明けた。それでアカラ御嶽という。

類話6　降神に降りた神様が潮が引いたのでアハラ御嶽に行くと夜が明け、それでアハラ御嶽という。

類話7　降神に降りた神は、そこからアカラ御嶽に行き伊是名島を統一した。

類話8　唐から流れて来た人が降神島につき、そこから伊是名城に渡って始めて人が住むようになり、その人が拝まれている。

類話9　城から王様が降神島に降りた。千原の近くの山に神様を拝みに登ると、夜が明けたので、アカラ山という。そこから勢理客の大野山に行った。

類話10　神武天皇が降神島に渡った。

類話11　神様が一人アハラ御嶽に隠れていたが、その神様が出ると世は明るくなったのでアハラ御嶽という。

類話12　祖先が夜降りて来て、朝早く山の頂上に登ると太陽が上ったのでハーラ御嶽という。

類話13・14・15・16・17・18・19、前掲話などに同じ。

前掲二話と十二の類話を比較すると、降神島に関する伝承は、かなり多様な変化を持っていることがわかる。類話の11・12は明確には降神島への降臨とは言っていないが、多くの話者が降神島を同時に語ってもらった中の話なので、他の話者の述べたことを避ける表現の省略があると考えられる。これらの話を比較すると、目立った違いだけでも次のような異伝が存在する。

①　降神島に降臨した神格――神様、多数の神、天照大神、天から降りた人、唐から流れて来た人、王様、神武天皇、祖先

②　アカラ御嶽――神降臨で世の中が明るくなった山、神の裁きの場所、神が長く住んだ山、神が四方をながめた場所、行き着いた時夜が明けた山、伊是名島を統一した場所、神が隠れた山

③　神の巡幸の経路――降神→アカラ御嶽→クマヤのガマ、降神→海→クマヤガマ、降神→アカルイ御嶽→天城→クマヤガマ、降神→アハラ御嶽→大野山、降神→伊是名城など。

①・②の中には、明治以後の日本神話による皇民化教育の影響や近代における伝承の合理化などが読みとれる。③の神の巡幸の経路については、これらの話のほかに参考とすべき話がほかにもある。

参考話1　降神に降りて来た神々が機を織ったのが布織（ぬのうい）岩である。その岩で神様が布を織っている時、神様の弟が馬の皮をはいで投

げこんだという。

参考話2　勢理客の後の大野山から屋那覇島まで、昔の神様が歩く道があり、その途中に、イビグサシ、ヒンプングサシと呼ばれる神の通る海中の岩がある。

これらの参考話によれば、神の巡幸は、もっと復雑だったのかも知れない。参考話1の布織岩は、伊是名城のすぐ西にある波の打寄せる海岸際の巨岩で、高い頂上と波の寄せる磯の中間に平らな岩場があり、その岩場が布を織ったといわ れる場所である。この岩には、唐旅に出たまま帰ってこない夫を待って、この岩で布を織っていたという伝えもある。同類の話は、アハラ御嶽の北、チジン岳の南斜面に三坪ほどの畳岩があり、この岩は、美織所（ちゅういんしょ）と名づけられて、尚円に会うため伊江島の仲村渠マカテが布を織った場所と伝えられ、あるいは、伊平屋の田名のクマヤの洞窟近くにある無蔵水と呼ばれる巨岩も、漁に出たまま帰らない夫を待って妻が機織をした場所といわれている。いずれも人里離れた場所で、布織岩や、無蔵（むぞ）水の場合は、登るのも容易ではない海辺の岩を何故わざわざ布を織る場所に選んだか、その理由をこれらの話は伝えていない。アハラ御嶽やクマヤの洞窟のような聖地のすぐ近くに、海に向う岩で女が機を織ったという伝説は、渡名喜島や、宮古島の東平安名崎にも伝えられている。

参考話の2の大野山は、類話の3・9にも見える山で、類話2に見える島の中央よりやや北西寄りの天城山よりもさらに北西寄りで、最も北の海岩寄りにある内花の集落と、島の西の集落勢理客の中間にあり、島では最も高い標高一二〇メーターの山である。現在は十二月に日を選び神女たちが山に登るが、以前は、この山に二～三日神女たちによる山ごもりが行なわれた山である。この山には、男女の性器を形どった神宝があり、山ごもりの神事は、この神宝を中心に行なわれているようである。子宝を授りたい女は、神女たちといっしょに山ごもりをし、この神宝を抱けば、子宝を授るとも伝えている。

ところで、降神島の神がこもったという伊平屋のクマヤの洞窟には、次のような話がある。

参考話3　伊平屋が敵に攻められた時、人々はすべてクマヤの洞窟に隠れた。ところが逃げ遅れたものが敵につかまり、このことが敵に知られ、敵はクマヤの洞窟に木を積んで中にいた人々をすべて焼き殺した。この時、橋の下に隠れた兄と妹は生き残り、その兄妹が伊平屋の始祖となった。クマヤという洞窟の名も、人々がこの洞窟にこもったからだという。

この話は、伊平屋の始祖伝承であり、伊平屋では、もっとも有力な伝承の一つである。ただし、伊是名では、一話しか聴取されていない。

伊是名の二一話の降神島の話の中で、伊平屋のクマヤの洞窟と関連して伝えられている話は四話ある。そのうち三話までが、沖縄の近世の社会では、ほとんど人に知られるはずもなかった神武天皇や天照大神などと結合されているのは、降神島の話が、明治以後の神話教育などと関連して、降臨した神が天の岩戸にこもるという話型に変化したことを示している。それと同じ影響は、参考話1の布織岩における伝承にもあらわれている。肝心のクマヤの洞窟のある伊平屋では、多くの人々が伝える兄妹始祖説話とつながるクマヤの洞

窟の伝承がすでに有力な伝承として成立したために、天の岩戸神話の影響は少なかったが、それをほとんど知らない伊是名の方の伝承が、より強く、降神島説話の中で、天の岩戸説話にクマヤの洞窟を近づけることになったのである。そうだとすれば、伊是名の降神島の話は、クマヤの洞窟をのぞいた部分が、古い形だったと思われるのである。

おそらく、降神島の神来訪および巡幸説話は、降神島に降臨した神が、布織岩、アハラ御嶽・天城、大野山を巡幸する説話で、伊是名島で完結するものであり、巡幸が伊平屋島まで及ぶことはなかったものと考えられる。ただし、類話8に見えるように、巡幸地の一つに伊是名城が加わり、参考話の2にある屋那覇島もその巡幸地の一つであったことも考えられる。また、アハラ御嶽の北、美織所を中腹に持つ地神山も、その名義からすれば、有力な巡幸地の一つとも思われる。これらの巡幸地は、字伊是名の南にある屋那覇島をのぞけば、左図のように、東南の降神島・伊是名城を起点として

アハラ御嶽↓地神山↓天城山↓大野山とほぼ北西に一直線に巡幸したことになる。この東南から北西の線は、伊是名城一〇〇メートル、アハラ御嶽六六メートル、地神山一二〇メートル、天城一〇二メートル、大野山一二〇メートルと、伊是名では最も高い山が連らなる分水嶺でもある。降神島に降った神は、この分水嶺を北西に縦断することになる。

(2) 粟国、渡名喜の来訪神伝承

伊是名の来訪神説話につづいて、那覇の北西五七キロにある粟国島と、那覇のほぼ真西五四キロにある渡名喜島の来訪来説話を見て置きたい。粟国島の調査は、昭和五五年八月に、渡名喜島は、昭和五八年に調査を行なった。

粟国島では、伊是名ほど明確な来訪神説話を聴取することができなかったが、関連する話として神里節の由来譚を多くの人々から聞くことが出来た。その梗概は次の通りである。

神里節由来

昔、粟国島の栄村に住む神里という農夫が、多くの黍を作っていたが、急に風が強くなったので、まだ穂は青いが苅取ろうとする。すると神があらわれ、今吹いている風は、黍を倒すような風には、ならないことを教えてくれる。ただし、神に教えられたことは、親や子にも話してはならないといわれ、神のしるしとして、赤い豆を与える。神里が家に帰る途中、神がふたたび親しい友人の姿となって現れ、神里に聞くとうっかり気を許して神と会ったことを友人に

伝える。神里はたちまち気を失いしばらくして目覚めると神からもらった印もなくなっていた。

この話は、題名にもあるように、神里節と呼ばれる粟国に伝わる口説風の歌の由来である。この歌は、七五、七五、七五の音節で一連となり、全部で二一連からなるが、歌い始めたら最後の一句まで誤らずに歌わないと神の祟りがあると信じられている歌である。この話は、神の出現の話ではあっても、神の来訪や巡幸を直接伝えている話ではない。ところが、神里節由来の説話には伝えられていないが、神里節の一四番では、神が農夫の神里にこう伝える。

翌年六月二十日ごろ、わぬん天から下りてちゃい
いせに話さば聞かすくと

一体この神里節の六月二十日とは、どのような日なのであろうか。粟国島の最大の祭りは、旧暦六月二十五日に行なわれるヤガン折目の祭りである。この祭りについては、次のような由来譚がある。

ヤガンウユミの由来

昔、粟国島では、六月ごろ悪神があらわれて、人の鼻をそいだり目玉を取ったりした。今帰仁城から来た平敷大主という人が、粟、花米や酒、魚を持って悪神の現れるヤガンガマに行き、鐘、鼓で神をおびき出すと、悪神はヤガンガマを出てカジヌク御嶽、チビ、イビガナシに行き、やがてグスクマ大屋あたりで姿を消した。六月のヤガン折目は、この様子を再現するため、神の通ったところを廻って行なわれる。

神里節の六月二十日ごろというのは、このヤガン折目の日を指していたのである。すなわち、もともと神里節由来にあらわれる作物について教える神も、ヤガン折目の神も別な神なのではなく、同一の神であり、悪神とされた神は、豊穣神だったと思われるのである。ヤガン折目の由来譚は、話がやや前後しているところがあると思われるが、祭られないため、あるいは、祭りを中止したために、神がさまざまな祟りをなし、その神を祭るようになったために、村は栄えるようになったとする沖縄各地の話の類型に属しているのである。

そうした視点からこのヤガン折目の話を見ると、ヤガンガマに出現する神の巡幸説話であることがわかり、さらにその巡幸説話は、ヤガン折目に支えられていたことを知ることができる。もっとも、ヤガン折目の行事も、その由来譚においても、巡幸については明らかであるが、海を渡って来訪する要素は見あたらない。

しかし、神が出現したヤガンの洞窟、すなわちヤガン御嶽は、島の最北端のやや東寄りにあり、神が一時留ったとされるイビガナシは島の中央部よりもやや南西寄りにあって、集落の最も遠い海辺に神が出現し、集落に巡幸して姿を消したことになるのである。あるいは、海の彼方から来訪する神であったのかも知れない。

海の彼方からの神の来訪を明確に伝えるのは、渡名喜島の伝承である。渡名喜島西北約四キロの沖にある入砂島から神々が渡名喜島を訪れる話をまとめて紹介すると、次のようなものであった。

入砂島の神の話

うるう年になると、入砂島から神様が白い船に乗って渡名喜島の最南端にあるエイジジーと呼ばれる岩に船をつけ、その横にある湧き水で水浴をすると、赤い石の上で着物を着がえ、竹で編んだ笠を

かぶって巡幸し、渡名喜の村の始りのころ人が住んだといわれる島の最北端の里と呼ばれる西森に登ったあと集落に入り、集落の中の四つの殿を拝んでその後沖縄本島最北端の辺土岬に帰っていく。

これは実は伝説なのではなく、三年に一度行なわれる渡名喜島最大の祭りである旧暦四月のシヌグ祭りについて村人たちが述べたものなのである。もし、この通りの巡幸のコースだとすると、神は村の最も西北の入砂島から一度最南東のエイシジに行き、そこから高い山を越えて、渡名喜島を縦断して最北端に行き、その後やや戻って集落に下りて人々の前にあらわれ、やがてはるかに遠い北東の辺土岬に行くということになる。もっとも辺土岬に帰るということは入砂島に来訪するのも辺土岬からだとする考えがあることがうかがわれる。この複雑なコースが何によるのかが問題となるだろう。ただ、最南端のエイシジに船を着けるのは、巡幸コースに、南端近くにある標高一六五メーターの大岳、島の東端の標高一七八メートルのヲモ岳という二つの渡名喜では最も高い山を組み入れるためなのかも知れない。さらに、ヲモ岳からは集落および島の最北端の標高一四六メートルの西森が、北東の方向となることにも意味があるのであろう。

なお神が出発する地点の入砂島は、人々から神聖な島として信じられており、山羊のような姿をした神がいると伝え、入砂島では、山羊を飼ってはならず、したがって山羊がいないのに、潮が引いたあとの砂浜には、時々山羊の足あとが円を描いて残されているという。この入砂島の山羊と粟国島の悪神をつなぐような話が多良間島に伝えられている。それは多良間島のパルマッツー由来の話である。

パルマッツー由来（梗概）

昔多良間島では、一人前になると一人につき三斗入りの粟を一俵とし、三俵ずつ上納していた。ところがある年の収穫の時期になると畑の粟がみんな盗まれたり荒らされたりして、それから何年もそそんなことがつづいた。そこで畑に出て見張っていると、夜中に山羊のようなものがあらわれ畑を荒らし始めた。そこでその中の一匹を補えてわけをたずねると、竜宮の使いで初穂祭りのしかたを教えに来たという。その祭りとは、三斗を一俵として三俵を畑の真ん中の石の上に置き、さらに御神酒もいっしょに供えると竜宮の神、山の神がそれを受けとって毎年それからは豊作になるということだった。見張りをしていたその男が、そんなに多くはこの畑では作れないというと、山羊の姿をした神の使いは、一斗というのは、かたつむりの殻の一つを一斗としてはかり、それを供えたらいいと教えたのでそれから山羊のいう通り畑での祭りをするようになった。これが多良間島のパルマッツーの由来である。

多良間島でのこの話の他の類話では、山の神の名は登場せず、出現するのも山羊のような姿ではなく、山羊そのものが登場し、供える場所は畑の四隅で、供えるものは、御神酒、団子、野菜のあえものなどになっている。パルマッツーとは、畑での初穂祭りであり、現在も多良間島では行なわれている。

この多良間のパルマッツー祭りを教えるために出現した山羊と、渡名喜の入砂島に出現する山羊の姿をした神は明らかに関連している。すなわち、ともに海中から出現する神だからである。多良間では、その山羊は、竜宮の神の使いであり、その神の使いの指示に従

えば、豊作を約束する神でもあった。そして何よりもこの話の中には、豊穣神は海中の竜宮の神であり、山の神でもあるとする点が注目される。

粟国の話との関連としては、祭られない神の怒りが禍いをもたらし、その神を祭ることによって豊作が約束されるという点が共通しており、さらに、ともに、海辺に出現する神である点も共通しているのである。

(3) 前慶良間の来訪神

那覇と久米島の中間に点在する多くの島々は、慶良間諸島と呼ばれるが、そのうちの那覇寄りの島々で渡嘉敷村に属する島々は前慶良間と呼ばれ、久米島に近く座間味村に属する島々は後慶良間と呼ばれる。ここでは、昭和五八年に行なった民俗調査をもとに、前慶良間における来訪神とその巡幸を見て置きたい。

前慶良間には、三つの集落があった。その一つは、那覇と前慶良間の主島である渡嘉敷島の中間にある前島の集落である。前島は、昭和三十年代に一度無人の島となった。しかし、昨年ごろから、夏だけ二〜三軒の家族が再び住むようになった島である。あとの二つは、主島である渡嘉敷島の北東の海岸寄りにある字渡嘉敷と、南西の海岸寄りにある字阿波連である。この前慶良間の三つの字は、これまで見て来た伊是名、粟国、渡名喜の集落とは条件が異なるため祭りの組織のあり方も異なっている。伊是名島は、島の海岸近い周辺部に五つの集落があり、神の巡幸の道筋に沿って山が連らなっているが、陸上の交通はそれほど困難ではなかったため一つのまとまった降島神からの神の来訪と巡幸説話を成立させることが可能であった。粟国島は、島合体が平坦な島で、島の中央部やや南寄りに集落が散開しているが、これも同じ祭りと同じ話を伝えることが可能であった。渡名喜島の場合は、島の唯一の平担地が、島の中央よりもやや北部にあり、そこにすべての人家が密集しており、したがって祭りも一つであった。

前慶良間の三つの集落の場合は、前島の集落は、渡嘉敷島をはるかに海をへだてているため、渡嘉敷島とは異なる祭祀組織を持ち、同じ渡嘉敷島の字渡嘉敷と字阿波連の間は、距離もかなり遠い上に間には高い山があってかなり陸路が困難であったため相互に強い集落としての独立性を持ち、したがってこの二つの字でも祭祀組織は異なっていた。すなわち、前島、渡嘉敷、阿波連は、同じ村ではあっても祭りはそれぞれ独自に行なわれていたのである。

この三つの字には、それぞれ来訪神が登場し巡幸する祭りがあった。それを順次見て行きたい。

1 前島

前島は無人に近い島であるため調査は困難である。おおよそわかったことは、種取り祭の時に来訪神が現れたことである。

田の苗代に種を降ろすころなので、字渡嘉敷と同じ、旧暦の九月ごろではなかったかと思われるが、旅のカンジャナンーと呼ばれる神が、糸満にほど近い、渡嘉敷からすればはるか東南のルカン礁から前島に来て船つなぎ岩と呼ばれる島の東岸で集落のやや北寄りにある浜に船を寄せ、島の巡幸と何日間かの祭りの後に、ウークイ浜

（お送り浜）から島人に見送られて再びルカン礁に帰って行ったという。なお、島の人たちが最も強く信仰している御嶽は、南北に細長い島の背骨のように南北に島の中央に連らなる山の中でも、最も高いやや北寄りの山であって、そこには現在も神祭りの香炉があり、その場所が種取り祭でも重要な祭りの場であったと思われる。こうした話を何人かの前島に住んでいた古老たちから聞いたが、聞きようによっては、行事ではなく伝説とも思える語り方であった。

2　渡嘉敷

字渡嘉敷も来訪神に関する説話はない。ただし、旧暦九月の種取り祭には、ヤフインチャーと呼ばれる神が出現する。そこで、字渡嘉敷の種取りの行事を紹介して置く。

字渡嘉敷の種取りの行事は、神女たちが日を選んで行なった。日取りが知らされると、それぞれの家では苗代を作り、稲種を川の水につけ発芽させて置き、種取りの日の初日にその種を苗代にまいた。この日に使う稲種は、村に古くから伝わる赤米の餅米と、白いうるちだった。また祭りの初日からミシトゥ（召人）と呼ばれる男二人が祭りの期間中嘉手苅川で誰れにも見られないように沐浴し、祭りの準備にあたった。

神女たちは、祭りの初日から三日間、渡嘉敷神社でウタカビ（御崇べ）で各御嶽への祈願をした。この御願が初まると人々は、字渡嘉敷の集落に沿って流れる小川が海に入る川尻と呼ばれる場所に行くことが禁じられた。それは、その川尻と呼ばれる場所が神の着く場所だからである。御願が始って三日目になると、渡嘉敷島の東南にあるルカン礁からヤフィンチャーの神が渡嘉敷島に着く。

その翌日、御願を初めてから四日目にあたる日になると、村の人たちは、神の現れるミチ山が見える場所にすべて集まり、かなり遠いミチ山の中腹に姿を見せた神様を拝んだ。この時、五人ほどの神女が白い衣裳を着て踊るのが小さく見えた。村人たちが神の姿を見ても良いのはこの時だけであった。その日の夕方になると村の人々は隣組ごとに一軒の家に集められ、神様が外を通る時間になるとみんな正座して物音一つさせず、慎んで神の通るのを拝んだ。この時は外に出るのはもちろん、戸のすき間から外をのぞくことも禁じられていた。

ヤフィンチャーの神は、集落を通る時馬に乗って通るということだった。渡嘉敷島では馬を飼うことが禁じられ、したがって馬は一頭もいないが、この時はヤフィンチャーの神の馬の蹄の音がした。馬の足音は、やや足早に歩くような音で、ほんとうの馬蹄の音に聞えた。こうしてヤフインチャーの神は、馬で集落の中を通り、船をつけた川尻からまた船に乗ってルカン礁に帰って行った。神女たちが川尻までヤフィンチャーの神を送るとそれで祭りは終った。

渡嘉敷の種取りに神があらわれ馬の足音がしたのは、昭和二～三年ごろまでで、それ以後は行事の内容も省略されるようになり、現在の種取り祭は、一日だけで行なわれるようになっている。

3　阿波連

阿波連では、大正十四年ごろまで、ほぼ一週間にも及ぶ種取り祭りが行なわれた。この祭りの期間は他の島や、他の字の者は、一人も阿波連の字に入ることが許されず、他の島の船が阿波連の浜に寄ることも許さなかった。

祭りの時期に海が荒れても祭りが出来るように、それぞれの家では夏ごろから網で取った魚を干してカーカスと呼ばれる干魚にした。また、祭りのかなり以前から、神女たちは、村はずれの海岸にあるモトマルシーと呼ばれる岩に夜集まり、祭りの準備をした。このモトマルシーでした神女たちの相談は、夫に話すことも禁じられ、その期間に村人がそこに立ち寄ることも禁じられていた。

旧暦十月の一日から七日にかけて祭りは行なわれるが、神女たちの御嶽の清掃や、御嶽廻りと御願などと並行し、集落と浜との間のヌールンと呼ばれる場所にトマヤーと呼ばれる小屋が三日目までには作られ、完成した後は村人が近寄ることが許されなかった。

四日目には、新しく神女を出した家では盛大な祝いをした。新しく神女になるためには、メーナンと呼ばれる役目を終え、さらにノロウッチと呼ばれる神女たちの補佐役を努めたあとに、カナムイガナシ、トンベーガナシ、ハチレーガナシ、テンジクガナシなどという神の名をもらい神女となった。五日目には、御浦まわりと呼ばれる御嶽を廻る行事が行なわれた。これは二手に分かれて神女たちがウムイを歌いながら各御嶽を廻るものであった。御嶽の多くは、かなり高い山であり、その山々を白い衣裳をつけ頭には白鉢巻、片手には飾りを下げたクバの葉の扇、もう一方の手には九尺ほどの棒に上の方を五色の布で飾り、紅・白の旗を下げたものを持って朝から夕方までかけて廻った。六日目は、阿波連神社での祈願をした。

最終日の七日目が、人々の前に神が姿を現す日であった。この日は、一組の神女は字近くの山上にある祖霊を祭った御嶽、もう一組は、古い集落のあった場所に行って来るが、これは神の迎えといわれている。神女たちが神を迎えて御嶽から降りて来る時、村人たちは集落の前の畑の上に、むしろやゴザを敷きその上に正座して神女たちが通り終るまで頭を上げることが許されなかった。この時は、家の中にいることも、頭を上げて見ることも禁じられていたのである。神女たちの行列がヌールンにある仮屋に入るとようやく頭を上げることが許された。しばらくして、仮屋の中から神女が出てドラを鳴らすと村人たちは再び頭を下げた。仮屋から出た神女たちが円形になってドラと鼓を鳴らし手に持った九尺の杖の旗を下して踊りながらウムイを歌った。ドラの音と踊りがはげしくなるとメーナンと呼ばれる若い女たちが正座して頭を下げている村人の前に一列に並び腰高に座って村人たちからは神女たちが見えにくいようにした。

そうしているうちに赤い神のヤヘーガナシが現れた。この時神女たちの踊りを盗み見することも許されていなかったが、ヤヘーガナシを直視することは、もっときびしいタブーであった。そのタブーを侵した者はきびしく処置されたという。ヤヘーガナシが出現した最後の年の大正十四年に、ヤヘーガナシをこっそり見た人がいる。そのことを詳しく述べることはできないが、ヤヘーガナシが姿を神女の間にあらわしたのは、わずか三分ほどの短かい時間だったという。

その日の晩がヤヘーガナシの帰る晩で、各家では、戸をすべて閉して家族全員がかしこまってヤヘーガナシの通るのを送った。外に出ることも、のぞき見をすることも禁じられる中を、ヤヘーガナシが馬の蹄の音をさせて通ったという点は、字渡嘉敷と全く同じである。

字阿波連の神は、どこから来訪するのか前島や渡嘉敷ほど明確ではない。しかし、この種取祭りの時に、浜から少し海中に入ったと

ころにある岩の前に神を迎える香炉が置かれ、その岩は、神様の船の綱を掛ける岩、すなわちツナカケジーと村人たちからは呼ばれた。そして、この岩は、種取り祭り以外の時でも、船をつなぐことが許されない岩であった。阿波連の神も海の彼方から来訪する神であったことだけは確かだったのである。

(4) 来訪神巡幸説話と祭り

伊是名の降神島を中心とする神の来訪と巡幸を伝える説話から始って、粟国、渡名喜の来訪神説話と神事、さらに前慶良間の種取祭りの内容を見て来たのは、これらを通して、神話と神事の関係を沖縄本島西部諸島のワクの中で検討したかったからである。

すでに見た通り、伊是名の降神島の伝承は、まさに神の来訪と巡幸の神話であった。東南の海上に浮かぶ岩ばかりの荒波が打ち寄せる降神島は、初めて島を訪れる者にとっても神秘な何ごとかを語りかける島である。神話に支えられてこの小島を見る伊是名の人たちにとっては、さらに神聖な島であった。その島から神は世の始源に伊是名島に来訪し、伊是名島の最も姿良く高い山々を巡幸した。

粟国に来訪する神は、六月二十五日のヤガン折目に登場し、そこに登場する神は、海辺の岩穴から出現する豊穣神であった。粟国の場合のこの神は、ヤガン折目の由来と神里節由来という二つの由来譚とも結びついており、ヤガン折目は、昔の神を祭り始めた時の事件を毎年行事として反復することにあった。

渡名喜島の場合は、うるう年に行なわれる入砂島からの神の来訪と島内巡幸の神事を、神話のように伝えていた。たとえば、神は入砂島から白い船に乗ってやって来るというように。それはすでに見た通り、シヌグ祭りについての話であり、神話ではなかった。

前慶良間の三つの字は、来訪神とその巡幸についての神話を伝えてはいない。しかし、神が海の彼方から来訪しそれぞれの字を巡幸する神事は、大正の末期か、昭和の初期までは種取りの行事として厳重なタブーの中で行なわれていたのである。

神話とは本来神祭りの中での神に扮したものによる語りか、神を祭るものの神を讃美する詞章であるという考え方がある。しかし、ここに見る神話は、必ずしも神に扮した者の語りでもなければ、神を讃美する詞章でもない。むしろ、神事そのものがここには存在しそして神事が記憶の中に残って神話のように伝えられた説話があるのである。

たとえば伊是名の降神島に関する類話1では、その説明の部分で八月十七日のイルチャーと呼ばれる航海安全を祈願する祭りでは神女たちが、神の隠れている家のまわりで太鼓を打ちながら踊ると天照大神に扮した人は、隠れた家の中から出て来ると伝えている。神名は新しい時代の影響を受けて天照大神になったが、その出現する人間の扮した神とは降神島に降臨し、伊是名島に来訪し巡幸した神なのである。そうしたことから、神話そのもののように読みとれる伊是名の神話の背後にも、伊是名の神女たちがくり返し行なった神事の基盤があったことをうかがうことが出来るのである。

逆に神話的な伝承は伝えられず、神事が近年まで行なわれた前慶良間三字の場合は、神事が消滅した後に伊是名島の降神島と同じよ

うな神話を成立させることが可能だったのである。粟国島や渡名喜島の場合は、この伊是名型の神話伝承と、前慶良間型神事伝承の中間に存在すると考えることが可能である。

もっともこうした神事と神話との関係を、沖縄のすべての神話に適用することは誤りであろう。神話の中にはもっと象徴的な意味合いをもつものもあれば、世界的な類型にしたがって成立しているものもある。ミルクとサーカの二神が争いミルク神が勝ったとする神話などは、きわめて象徴的な意味が強く、犬祖伝承や兄妹始祖説話日光感精説話、卵生説話などは、汎アジア的類型や世界的類型に支えられているからである。

しかし、来訪神説話の場合にかぎって言えば、これまで見た沖縄本島西部諸島のように神話と儀礼との間に強い関連があったのではなかろうか、それは各地に、来訪神とその巡行の神事が存在し、さらにその神事と結合する説話があるからである。東村の平良、川田宮城三字で行なう豊年祭では、祭りの日に南の平良から出す船に祝女をはじめとする神女たちが乗り、その船が、三字発祥の地である川田に着くと、神女たちは東の方に向って祈願する。これはウフアガリ島（大きな東の島）に無事川田の浜に着いたことを報告する祈願であるという。神女たちは実際には平良から出発したのであるが儀礼としては、はるかに遠い東のウフアガリ島から川田の浜に着いたとされているのである。その後神女たちは、川田の聖地を巡廻する。この行事は、その由来は伝えないが、これまでの伊是名をはじめとする神話と神事を考えるとき、極めて示唆的である。すなわち渡名喜のシヌグ以外は、船による直接の神の渡来を伝えないが、はるか遠い神の世界から、神の渡来をいう時、それは神事としては、近くの渡来しやすい場所からの来訪として行なわれ、観念としては遠い神の世界、それも太陽の運行と関連して、東や南から訪れると考えたのではなかろうか。そうでなければ渡名喜のように辺戸岬から入砂島にそして島の南端から上陸して東に廻り村落に下るという復雑なコースは考えられず、伊是名島の場合波の荒らく船の着けにくい東南の海上の降神島を名の通り神の降る島としながらも、もう一つの神の道を参考話の2のように、波静かな屋那覇と伊是名島の間に設定する必要はなかったと思われるからである。さらに言えば神事だけのように見える神の来訪と巡幸も、実はそうした神話的な方位観や神話的発想そのものが支えていたとも考えられる。神話と儀礼との関係は、宮古島のんなふか祭りや、来間島のヤーマスプナカなどの秘儀的に伝えられた祭りとその伝承の中に見ることが出来るがここではふれないで置く。

間口を広げすぎると神話と儀礼の相互関係を述べることが出来なくなるので割愛したが、伊是名から前慶良間にいたる島々の説話と儀礼の中には、海辺の岩で機を織る女や、性的儀礼をともなう山ごもり、水平表象と垂直表象の問題など今後解明すべき多くの課題がある。

注1　『いぜな島の民話』伊是名村教育委員会昭和五八年三月発刊　伊是名に関する資料はすべてこの本によった。

注2　『多良間村の民話』多良間村昭和五六年三月発刊